

皆さんこんにちは。  
エンカレッジアンドカンパニーの堀です。

私のコラムでは、中国の故事成語について、我々の日常に何か応用できないか、という観点でシリーズとして書き綴っています。

第10回目は孫子の兵法についてです。

あまりにも有名ですが、ついこの間まで読んだことがありませんでした。史記の中に孫子本人が登場するので、私の中ではもう分かったつもりでいました。加えて、兵法については懐疑的な先入観を持っていました。懐疑的の意味は、たくさんの兵法があったはずだが、現存していないという事です。たまたま孫子のは現存してて、ちょっと良かったぐらいで有名になりすぎただけで、本当はもっと優れた兵法があったのではと。かなりの先入観を持ってましたが、それを壊してくれたのはこの文章です。

「戦が巧い将は、国民から2度徴兵することなく、食糧も3度と運ばずに戦いを終わらせる。そうした将は、必需品は自国のものを使うが、食糧は敵から奪ってまかなう。戦いは、遠征ともなれば食糧を大量に輸送する為、国家・国民の財政を圧迫する。近場での戦いであっても、軍がいることで物資が不足し物価が上がり、国民の財産が尽き、納税にも苦勞するようになる。こうして軍事力も底を尽き、こうして国民の財産の70%は失われる。戦車が壊れ、馬は疲れるので、国家の財政の60%は輸送費でなくなってしまう。」

作戦篇のこの文章を読んだ時に、B.C.500年（日本では縄文時代後期勿論文字はない）にそんなことまで考えていたのかと純粋に驚きましたし、視線が国を動かす立ち位置からであることに大人な感覚を抱きました。

別観点から補足すると、我々が目にする孫子の兵法のテキストはA.D.200年頃に曹操が分類しまとめあげたものだそうです。

九地篇の「軍を団結させる方法」を今回の話題にしようと思います。

30代以降は、自分がデキるのは当たり前で、むしろ他人を育てて一体感ある組織を作れるか？という評価項目の方が重要視されると思います。

自分のことなら何とでもなりますが、他人を自分と同等かそれ以上に育て、更に自分がいなくても期待どおりのアウトプットをしてくれる組織なんて...

ま、これは永遠の課題だと思います。

# Encourage & Company

孫子はこう答えます。

「兵を用いることを得意とする者が率いる軍は率然（常山に棲む蛇）のようである。こいつの頭を撃つと尾が反撃し、尾を撃つと頭が反撃する。腹を撃つと頭と尾が同時に反撃してくる。

①全軍をひとつに団結させるのは大義名分で兵士を鼓舞する政治的リーダーシップである（政の道）。

②そして勇敢な兵と脆弱な兵、皆の力を活かす為に、兵が必死で戦わざるを得ない条件を整えること（地の理）。

この2つでもって兵を用いることを得意とする者の軍は、全軍がまるで手を繋いでいるかのように一体になるのである。その様は率然が如きであろう。」

命令がなくても（自然に）、組織にとってどうかという視点で、皆が自分の頭で考え、行動する組織を孫子は良しとします。

それを実現するファクターは「政の道」と「地の理」であると説明しています。

私は2つのファクターの本質は、「与えられるものではなく、自分がつくるもの」だと考えます。

大義名分を誰かに与えられた時点でリーダーではないですし、偶然その土地を行軍していたのではなく、必然的にその土地で戦いが起こるように歩調を合わせます。

歴史好きの先輩方に生兵法と言われないように、孫子の兵法をビジネスに応用してみます。

堀 洋三

-バックナンバー中国故事成語をビジネスに応用する-

第1回目は「牛耳る」。

第2回目は「鳴かず飛ばず」。

第3回目は「司馬懿仲達」。

第4回目は「我れ鳥獣にあらず」。

第5回目は「国土無双」「狡兔死して走狗煮らる」。

第6回目は「鼓腹撃壤」。

第7回目は「外戚」。

第8回目は「論語①」。

第9回目は「東郭先生と狼」。